

聖書：第一サムエル記8章9～18節

説教：主に聖別する

1 ダビデ王のしたこと

1) 国境を守る

どんな国も例外なく領土をもち、領土のまわりには国境というものが定められています。国境を巡って国と国とが争い、今でも紛争が起きています。それくらい重要なものです。ところがイスラエルの場合は、国境はあつてないようなもの。隣の国の人たちが国境を勝手に越えてきて、財産を奪い、町や畑を荒らしていく。そんな状態が続いていました。国を守るためには、強力なリーダーシップを持った王様を立てる必要がある。長老たちはそのように考え、神に願い出ました。その結果、初代の王としてサウルが与えられ、そしてダビデが王座に迎えられました。

イスラエルの王は、国を守るために戦わなければなりません。ダビデは、国境をかためるために何度も戦いの最前線に赴いていきます。今日の箇所には二つのことが書かれています。

2) ハマテの王と条約を締結する

一つ目は、ハマテの王トイのことです。ダビデは、北の地域で大きな力をふるっていたハダデエゼルを打ち破りました。8章6節に、「ダビデはダマスコのアラムに守備隊を置いた」とあります。ダマスコはイスラエルの北の国境に接している地域です。そこへ守備隊を置いたということは、北側の国境線をきちんと定め、敵が入ってこないように守りを固めたということになります。

いっぽう、ハマテの王トイはハダデエゼル

から戦争をしかけられておりました。自分には勝ち目がありません。このままでは多くの人が殺され、国は滅ぼされ、自分も死ぬことになります。ぎりぎりの所の追い込まれました。そんなとき、思いがけなくダビデがハダデエゼルを倒したとの知らせが入ります。柵からぼた餅です。小躍りして喜んだでしょう。そして政治家として計算をはじめます。ダビデを敵に回したらハダデエゼルの二の舞です。同盟を結んでおいたほうが得策です。すぐに息子をダビデのところに送り、銀の器、金の器、青銅の器を差し出します。簡単に言えば、「お金を出すから、困ったときにはまた助けてね」、ということでしょう。ダビデはこれを受け、トイの間で安全保障条約を結ぶことにしました。このことの意味については、またあとで触れることになります。

3) エドム人をしもべとする

その前に、ダビデが直面した政治問題の二つ目のことを見ておきます。13節。「ダビデが塩の谷でエドム人一万八千人を打ち殺して帰って来たとき、彼は名を上げた。」

エドム人は塩の海、今は死海と呼んでいますが、その海の南側に住んでいた人たちです。その人たちを征伐したことでダビデは名を上げたとあります。それには一つの事情があります。モーセがイスラエルの民を率いてエジプトから脱出し、約束の地カナンに入ろうとしたときのことです。モーセは、エドムの王様に対し丁寧な手紙を出して、エドム人の土地を通らせてほしいとお願いをしました。

ところがエドム人は、軍隊を出してきて、もしここを通ることがあれば殺すと回答してきたのです。エドム人はもともとイサクの子どもであるエサウの子孫にあたります。つまり彼らは親戚関係にあるのですが、イスラエルが困っているときに、冷たく追い払ってしまった。モーセの時代からダビデの時代までおよそ五百年の隔たりがあります。どんなに時間が経っても、エドム人に対するうらみは忘れません。それが、ダビデがエドム人を制圧したと聞いたのですから、大喜びです。国中が大騒ぎになります。ダビデが王となったことを喜ばなかった人たちも、ダビデの力を認めざるを得ません。

また、ダビデがエドムに守備隊と置いたことで、南側の国境も定まります。これまでばらばらだったイスラエルは、内に対しても外に対しても、名実共に一つの国としてのまとまっていきます。

2 主の救いはどのように書かれているのか

1) ハマテの王トイの計算

ここは、あたかも歴史小説を読んでいるような場面です。でも、聖書はどこを開いても、神の救いのことが中心テーマであるはずで、ここにも神の救いのことが書かれていると見るべきです。いったいどこに書かれているのか。「主は、ダビデの行く先々で、彼に勝利を与えられた。」これでしょうか。そうかもしれません。でもそれだけでは大切なことを見落とすことになります。

ハマテの王トイに目を留めます。彼は何をしたのか。何が自分にとって有利であるか、そういうしたたかな計算でした。自分が生き延びるために、自分の国を守るために、金銀

財宝をダビデに送り、安全保障条約を結ぶ。ダビデを利用しているといってもよいでしょう。生臭い政治の世界のことで、信仰とはまったく関係ないように見えます。ところが、これが救いと関係があります。

2) 主に聖別した

なぜそう言えるのか。トイの息子ヨラムが多くの財宝を携え、ダビデのご機嫌を伺うためにやって来たとき、ダビデはどうしたか。ダビデは愚かではありません。トイの腹は読めています。トイが考えていることは、とても聖いとは言えない。ヨラムが持って来た物は、はっきり言えば汚い金です。けれどもダビデはこうします。11節。「ダビデ王は、それをもまた、彼の征服したすべて国々から取って聖別する銀や金とともに主に聖別してささげた。」

聖別する。簡単に言えば、神のために用いるために区別する、取り分ける。人のものではなく、主のものとする。そのような意味です。

トイは、神を信じる信仰からではなく、政治的な打算を心に秘めながら、贈り物を持って来たのですが、ダビデはそれを主のものとして取り分けて、主にささげました。これは何を意味しているのでしょうか。

二つのことが言えます。まず政治的な表現をするなら、ダビデはトイと安全保障条約を結び、トイを同盟国の一つに加えたこととなります。おまへは信仰者ではないからイスラエルの敵である、と言ったのではなく、たとえ信仰から出たことでも、イスラエルを頼る者を拒まない。なぜなら、かつてイスラエルがハマテと同じ経験したからです。エドム人の土地を通らせてくださいとお願

いしたとき、拒まれたことがありました。弱っている人たちが大ぜいいました。早く約束の地に入り、休ませてあげたい。けれどもエドムに拒まれ、つらい思いをしなければなりませんでした。

ハマテもつらい所に立たされています。ダビデに頭を下げなければ生きていけないのです。そのことをダビデは知っています。だから受け入れます。力を持った国にもてあそばれているハマテをあわれんだということにもなります。

そして二つ目のこと。ここから何が言えるのか。ダビデがハマテと条約を結びました。ハマテに何かあれば、ダビデは駆けつけてハマテを救う義務が生じます。つまり信仰の面から言えば、ハマテは救いの中に入れられたことになる。

意外でしょうか。トイには信仰などない。ただ自分の国を守るためにダビデを頼ってきただけ。それでも救われるのでしょうか。救われます。

3 イエスのところに来た人たち

イエスをご覧になっていたかと思えます。イエスのもとには大ぜいの人たちが集まってきました。どんな人たちでしたか。病気の者、障害を負っている者、悩んでいる者、罪人と呼ばれて差別されている者たちでした。その中で、イエスを神の子と信じたのはごくわずか。多くの人たちはイエスは誰であるのかわからない。ただ病気を直してもらいたい。障がいをやしてもらいたい。目の前の問題を解決してもらいたい。ただそれだけで集まって来た。信仰があるとはとても言えない。しかしイエスはなんと言われたか。

マルコ2章3～5節を見てみましょう。「そ

のとき、ひとりの中風の人が四人の人にかつがれて、みもとに連れて来られた。群衆のためにイエスに近づくことができなかつたので、その人々はイエスのおられるあたりの屋根をはがし、穴をあけて、中風の人を寝かせたままその床をつり降ろした。イエスは彼らの信仰を見て、中風の人に、「子よ。あなたの罪は赦されました」と言われた。」

人のうちの屋根をはがし、並んでいる順番を無視してイエスの目の前に病人をつりおろす。とても正常な人がすることとは思えません。今なら警察を呼ぶ所です。病人を助きたい気持ちは理解できますが、やるのが度が過ぎてあまりにも身勝手と言われても言い訳はできないでしょう。ところがイエスは何をご覧になったか。「彼らの信仰を見て」とあります。私たちの目には、身勝手、自己中心、信仰のかけらもないとしか見えません。けれどもイエスの目には、彼らには信仰があると見えていたのです。

ハマテの王トイもは、自分の国を守るため、自分を守るための打算をもってダビデに近づきました。病人をつりおろした人たちも、他人のことなどよりとにかく家族を助けたい、そんなことしか考えていない。けれども、ダビデを頼る者、イエスの所に来る者、どんなどんな動機であってもよい。なにもわからなくてもよい。とにかく助けてほしい、そんな思いでイエスに近づくだけでよい。イエスは、あなたは信仰がある、と言ってくださるのです。これが神の救いです。

イエスをもっと知らなければ救われたい、と考える方もいます。でもそれはあとからだんだんにわかっていく。そんな順番でよいのです。

何も知らなくても、とにかくこの方とこ

ろに助けを求めて来る者は誰でも救われて
いく。そのような恵みがここに記されていま
す。